田中　琢
佐原　真　著

考古学の散歩道

岩波新書
312

田中　琢
佐原　真　著

考古学の散歩道

岩波新書

312

田中 琢

1933年滋賀県に生まれる.
京都大学文学部卒業. 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長をへて, 1992年から文化庁文化財鑑査官.
著書 ―『古鏡』(講談社)
『三角縁神獣鏡の謎』(共著, 角川書店)
『平城京』(岩波書店)
『倭人争乱』(集英社) ほか

佐原 真

1932年大阪府に生まれる.
大阪外国語大学卒業. 京都大学大学院博士課程修了. 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長をへて, 1993年から国立歴史民俗博物館副館長.
著書 ―『銅鐸』(講談社)
『日本人の誕生』(小学館)
『考古学千夜一夜』(小学館)
『騎馬民族はこなかった』(日本放送出版協会) ほか

考古学の散歩道

定価はカバーに表示してあります　岩波新書(新赤版)312

1993年11月22日　第1刷発行

著 者　田中 琢(たなか みがく)　佐原 真(さはら まこと)

発行者　安江良介

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

電 話　案内 03-5210-4000　営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054

印刷・理想社　カバー・半七印刷　製本・永井製本

© Migaku Tanaka and Makoto Sahara 1993
ISBN4-00-430312-5　Printed in Japan

目次

前口上――プロローグ …… 1

I　日本人とは？　日本文化とは？

1　紀元前後のボートピープル（田中琢） …… 12
2　象牙とハンコ（田中琢） …… 22
3　キモノと装身具（田中琢） …… 29
4　縄紋人のイヤリング（佐原真） …… 37
5　「わたしの茶碗」「わたしの箸」（佐原真） …… 42
6　世界最古のカードシステム（田中琢） …… 54
7　大工道具からみた日本人（佐原真） …… 65

II　生活環境と災害の情報

1　縄紋の森の復活（佐原真）……78
2　大昔の歯の語るもの（佐原真）……89
3　米について何がわかったか（佐原真）……101
4　花を飾る文化（佐原真）……115
5　道具の進歩と豊かさと（佐原真）……125
6　地震を発掘する（田中琢）……134
7　日本のポンペイ（田中琢）……141

III　考古学を考え、考古学から考える

1　国際化とは――考古学の場合（田中琢）……152
2　戦争はいつはじまったか（佐原真）……162
3　周辺からの視点（田中琢）……174
4　考古学の戦争（田中琢）……182

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

5　文化財保護の思想（田中琢）……190

切口上――エピローグ……205

＊本文中のカットは銅鐸絵画による。

前口上――プロローグ

佐原　まず、あなたとわたしとそれぞれが書いたものを、どうして一冊の新書にまとめたのか、そのことの説明から。

田中　もとはといえば、ふたりが、日本の現状を紹介する英文の月刊雑誌『ルック・ジャパン』に、一九八九年九月号から一九九〇年一二月号まで、考古学からみた日本の文化と社会というような話を交互に書いたこと。情報工学の猪瀬博さんがこの雑誌の相談役みたいな立場にあって、その紹介で、わたしに考古学の話を書いてくれんかという話がきた。それであなたを誘ってはじめたわけや。

これを岩波書店編集部の井上一夫さんに見せたんやな。そうしたら、これはおもしろいという。もともと、〝日本の原始古代というものは、諸外国とくらべてみて、それなりにいろいろな特色をもっている。

日本では常識であることが、外国の人にしてみたら、ちょっとびっくりしそうなことがありそうや〟と思ってはじめたことで、日本人にとってはごく常識的な話と思うたんやけど、井上さんはそやないという。いや、たしかにそうかもしれん、国際化、国際化というて、海外に知らせることも必要やけど、実は、知的関心をもつごくふつうの日本の人たちにたいして、研究成果をわかりやすく知らせるという努力が意外とされていない、そう思いなおした。それで井上さんの提案にしたがって新書をつくろうと話がまとまったけど、『ルック・ジャパン』掲載の一六本では、一本一本が短いし、新書にするには分量が足らない。それでふたりで雑誌『図書』に何本か書き、ほかにもいくつかくわえてこの本になったわけ。

佐原　あなたとは三〇年来の議論相手だけど、やっていることといい、興味のもちかたといい、文体といい、だいぶちがっていて、案外共通するものは少ないんだよね。『ルック・ジャパン』でも、『図書』掲載のものでも、テーマの選定は話しあったけれど、結局はお互い独立して書いている。何でそれがいっしょになるか。考えてみると、接近（アプローチ）の仕方はちがうが、考古学と現代の問題をつなげようという意識は共通している。それがこの本全体を通した課題（テーマ）、そういっていいだろうね。

国立歴史民俗博物館の同僚の春成（はるなり）秀爾さんがおもしろいことをいっていた。この本の書名は

「考古知新」としてはどうだという。温故知新になぞらえたわけで、なるほど、この本の趣旨をうまく表現していることばと思った。残念ながら、新書の書名としては適当でないということでだめだったが、考古学の論議をとおして現代を考えるという意味では、まさに〝考古知新〟やと思ってる。

田中　大きな意味では認めあっていて、しかも共通することが決して多くない、というのがおもしろいんやと思う。お互いゆずらんところは頑としてゆずらんところがあるしな。それがおもしろいのとちがうか。

書名は苦労したな。〝よもやま話〟とか〝こぼれ話〟では、何か大家の隠居話みたいやし、〝現代考古学事情〟みたいな案もあったが、わたしらが書いたことは、日本の考古学研究者のあいだで、あまり議論されておらんことや。だからそういうわけにはいかない。考古学からの現代批評とまでいえるかどうかわからんが、〝考古学から現代を見る〟とか、〝考古学から現代を考える〟とかいうような性格やと思う。しかし、肩のこらない読み物というかたちで入りたいから、堅い雰囲気はさけたい。それでいまの書名におちついた。でも、岩波書店には『物理の散歩道』というロングセラーがあったから、それを拝借した感じでいささか苦しい。

＊　＊　＊

田中　あなたがいったように、それぞれ独立して書いていて、文体もちがう。それは無理して統一しなかった。しかし、用語の表記がちがっていることは説明せにゃあかんな。たとえば「縄紋」、あなたは必ず糸ヘンをつける。素直な人だが、こういうところはえらい頑固や。「竪穴」も「縦穴」やろ。読者が混乱せんように、そのあたりの理由について話しますか。

佐原　「縄紋」はわたしの先生である山内清男（やまのうちすがお）さんが強硬に主張したことです。ただ山内さんの場合は、大森貝塚を発掘したモースの〝コードマーク〟を縄紋と邦訳し、はじめは糸ヘンをつけていたという学史上のことからくるんやけど、わたしはわかりやすくしようという立場から「紋」にこだわるんです。だいたい、「紋」と「文」はどちらも常用漢字に入っている。「紋」と「文」を区別しないと、混乱がおきる。「縄紋」だけならまだいいが、つぎのような場合はどうなりますか。「無文（むもん）土器」＝模様のない土器、飛鳥時代の「無文銀銭」＝文字のない銀銭、意味がちがうでしょう。また、「肋骨文（ろっこつもん）」「甲骨文（こうこつもん）」。こう、ならべてみると同じようなものかとみえるが、「肋骨文」は縄紋土器の模様の一種、「甲骨文」は中国古代の亀の甲羅や骨に書いた最古の漢字。模様は糸ヘンをつけることにすれば、よくわかるじゃないですか。それから模様がなくなることを、考古学では「無文化」という。「無文化」！

文化がなくなってしまうみたいですよ。「縦穴」を「竪穴」としたのでは、小学生は読めないじゃないかということ。それに、学問の歴史からみてもおかしくないということ。一八七七年に坪井正五郎さんが埼玉県の吉見百穴（よしみひゃっけつ）をみて、崖にあいているたくさんの横穴は住居跡だといった。これに対して、白井光太郎さんが、いや横穴は墓で家は縦穴なんだという論文を書いた。実は白井さんはその論文の表題には「縦穴」と表記しているが、論文のなかでは「竪穴」もつかっている。学史的にはどちらをつかってもいいことになる。横に対する縦の方がわかりやすい。そういう理由です。

田中　わたしの立場は簡単。ようするに、いま広くつかわれている文字でいいということ。縄文でわかるし、縄紋と書いたからといって、正確に〝紋様〟という意味でうけとってくれるかどうかは、また別問題や。わたしはいい悪いで判断しない。自分のいいたいことを伝えるためには、もっとも広くつかわれている文字やことばでやる。わたしはそういう考えかたです。しかし、あなたの主張は認めます。もっともや、と思うからね。理屈には合うとる。

佐原　わたしもあなたのような考えかたがあるのは認めます。しかし、あなたは本当に自分がこだわる文字はないのかね。

田中　わたしは文字にはあまりこだわらない。ところで、文字表記どころか、用語自体がちが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

っているところもある。大きなところでは、「旧石器時代」と呼ぶか、「岩宿時代」とするかということ。一九四九年に相沢忠洋さんが群馬県の岩宿遺跡ではじめて旧石器をみつけた。それで、あなたは縄文時代よりまえの時代を「岩宿時代」と呼ぼうという。わたしはいまのところ、「旧石器時代」。世の中の趨勢がどうなるか、見守っているところや。

佐原　簡単にいうと、一八六五年にイギリスのラボックが、旧石器＝打製石器、新石器＝精巧な打製石器＋磨製石器、ととらえた。磨製石器と農業、そして地質学的現代。これがすべて揃ってはじまると考えた。しかし、日本の「旧石器時代」、わたしのいう岩宿時代には磨製石斧もあるから、ラボックの分類では岩宿時代は新石器時代ということになりかねない。ところが、のちにチャイルドが、いまあげたそれぞれが揃ってはじまらないから、農業がはじまったら新石器時代と呼ぼうと提唱した。そうすると、弥生時代は鉄器時代だから、チャイルドの定義では今度は逆に日本には新石器時代がないことになる。これが広くうけいれられていて、いま、日本で縄紋を新石器というひとはごく少ない。だいたい縄紋時代のまえの時代を旧石器時代とすると、世界との比較ができないんです。たとえば日本でいう前期旧石器時代は、ヨーロッパの中期旧石器時代だったりして、世界のなかで日本を論じるときに混乱する。だから、日本では別の時代名をつくって、それでよそとくらべたり論じたりするほう

がいい。そこで「岩宿時代」をつかおうといった。わたしのまえに、角田文衛さんが提唱していて、わたしはそれを復活したかっこうです。

田中　非常にまともな考えかたやと思う。いま、だいぶ、「岩宿時代」といういいかたが広がってきたと思うが、まだ「旧石器時代」という研究者が多い。読者も「岩宿時代って、いつのことや」という人もまだまだ多い。「旧石器時代」なら「一番古い時代やな」とわかってくれる。わたしは大勢順応主義やから、「旧石器時代」と書いているだけで、必要があればカッコ内に「岩宿時代」と書く、そんなところや。

佐原　〝本土〟〝本州諸島〟についての説明も必要だな。

田中　日本列島の歴史を話すとき、少なくとも、北海道や南島とそれ以外とをわけた呼びかたが欠かせない。つまり本州・四国・九州の総称、それがない。そこで、あなたは〝本土〟と呼び、わたしは〝本州諸島〟と造語した。〝本〟という文字が入るのが気に入らん。そのあたりが日本列島の中心です、といわんばかりの表現になるしな。しかし、しかたがないやろ。

佐原　本州・四国・九州の総称がないと、とても不便なんです。〝本土〟と呼ぶことには抵抗があって、沖縄の人にも聞いてみたんだけど、沖縄では本土各府県などと呼ぶし、差別感はないと聞いたので、仮に〝本土〟と呼ばせてもらっている、そんなところです。

＊　＊　＊

田中　『ルック・ジャパン』に書いてからだいぶ時間がたっていることもあって、『図書』に載せたのもふくめ、導入部などを中心にずいぶん書きかえた。だからもとのままではない。たとえば、ハンコのことを書いたときは、象牙の輸入を禁止するまえで、輸入をめぐって議論があったときだったから、それにひっかけて、〝花押（かおう）というサイン文化があった、これを復活すればアフリカ象は救われるだろう〟と書いた。これは状況がかわった今ではとおらんですよ。いいたいことはもちろんかわらんが、いささか古くなったことは全部書き直さざるをえなかった。基本的には、もう書き下ろしやな。

佐原　出版が予定より遅れたのは、多分にわたしのせいであります(笑)。『ルック・ジャパン』の原稿はもとは日本文で、あなたの場合はフロッピーに入っているからそれを書き直せばいい。しかし、わたしは手書きで、しかも手元に原稿がのこっていない。『ルック・ジャパン』の英文を翻訳して日本語にもどしてみて気がついたんだけど、実は、この本がでるまえに、同じテーマについて何度も書いている。これで頭をかかえてしまって、あたらしい資料や話題をくわえて書き直すことになった。かえってずいぶん大変になったわけです。わたしは、なんで何回も同じ話をくりかえし書くのか、と反省しております(笑)。ただ、い

うべきことは何度もいわなければならないと思っているから、それなりに意味があると思っていますがね。

田中　それはくりかえしていうべきやないの。何でも、ことを行なおうと思ったら当然や。それから、読者の方々には、配列のこともいうておく必要がある。ひとつひとつ、独立したエッセイやから、それぞれのなかで古代から現代までいろいろ議論がひろがっておる。順序をつけたり、テーマごとにまとめるのはちょっと苦しいのだが、いちおう中心的にあつかったものを時代順や議論している内容からすると、こんなところかという便宜的な配列です。どこから読んでもらっても結構です。

佐原　それぞれ、一本一本で完結するようにしてあるから、多少、説明が重複することがある。これも申し上げておきたい。

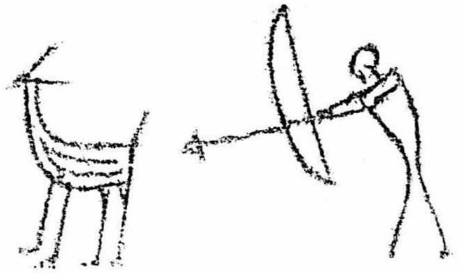
田中　では、そろそろ本文の方に入ってもらいますか。そのうえで、またつづけましょう。

*本書所収のもののうち、Ⅱ章1・5、Ⅲ章1・3・4は本書のために『図書』に発表したもの。Ⅲ章2・5はかつて『図書』その他に発表したものを抜粋・再構成、あるいは加筆・補訂したものである。くわしくは各エッセイの末尾に記した。その他は、テーマとしては『ルック・ジャパン』で

あつかったものであるが、大幅に加筆・補訂した。佐原の場合は、対談に述べた事情により、書き下ろしである。

I

日本人とは？　日本文化とは？



此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton